

林英輔先生と DSM 研究会

山井 成良
東京農工大学 工学研究院 教授

DSM 研究会¹は、情報処理学会の研究会の1つで、1996年に発足しました。DSM というのは、Distributed System Managementの略で、発足当初は分散システム運用技術研究会という名称でした。

その後、1999年に分散システム/インターネット運用技術研究会に改称し、その後統合により、現在はインターネットと運用技術研究会 (IOT 研究会²) として活動しています (図1)。



図1 DSM 研究会

1990年代後半、情報系センター³(以下、センター)の教職員は、単にネットワークや計算機のお守りをしているだけだと思われており、センターの業務は研究として認められていませんでした。林先生ご自身も物理学を専門とされていましたが、ネットワークやコンピューターサイエンスを専門としていないにもかかわらず、たまたま研究の過程で大型計算機を使っていたために、センターの教員をしていた人が多くいました。

当時、一度センターの教員になると、センターの業務をいくら行っても業績にはつながらず、飼い殺しのような状況でした。専門が別にある人はもちろん、コンピューターサイエンスを専門に研究している人でも、セン

ターで行っている業務は、研究ではないという見方が常識でした。また、学位を持っていない人も多くいました。たとえ学位を持っていたとしても、多くのセンターの当時の最上位ポストは助教授であり、教授にはなれませんでした。これでは、やはり意欲もなくなってしまう。このような時代が長く続きました。

最近になっても、特に海外ではこの分野が研究として十分に認められていないと感じています。IOT シンポジウム 2012⁴、DICOMO2013⁵で優秀論文賞を受賞した論文を、COMPSAC2013⁶に投稿したところ、ほとんど却下というひどい評価をつけられてしまいました。ところが、その国際会議の併設ワークショップで、IOT 研究会が共催している ADMNET⁷ というワークショップでは、近い分野の人が見ているので、良い評価を得られ、情報処理学会英文論文誌 (JIP) COMPSAC2013 特集号 (2014年7月発行) に採録されました。このように、センター業務の成果は、現在でも海外では研究として認知されていません。

日本でも DSM 研究会ができるまでは、このような状況でした。これに対して林先生は、センターの業務は新しい研究分野であり、運用上の工夫は全て研究業績だと強くおっしゃって、研究分野として立ち上げるきっかけとなりました。センターには専門家が必ずしもそろっているわけではないので、DSM 研究会で情報交換ができることは、非常に有用でした。

そして、1994年に分散システム運用技術 (DSM) 研究グループが発足しました。東京大学の石田晴久先生が主査をされていましたが、実質的には林先生が幹事として活躍されていました。

DSM 研究会が対象としていた研究分野の

1 <http://www.ipsj.or.jp/katsudou/sig/sighp/dsm/>

2 <http://www.iot.ipsj.or.jp/>

3 当時の国立大学における大型計算機センター、情報処理教育センター、(総合)情報処理センターや私立大学における同等の部局の総称

4 インターネットと運用技術シンポジウム 2012

5 マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム 2013

6 <http://compsac.cs.iastate.edu/index.php>

7 <http://compsac.cs.iastate.edu/admnet2013.php>

キーワードを並べたものが図1になります⁸。



図2 DSM研究会の研究分野

「危機管理」というキーワードも、一見無関係に思えるかもしれませんが、何か起きた時に危機管理は重要であり、DSM研究会では、センターのことであれば何でも扱うという姿勢が見て取れます。

研究会発足後は、順調に会員数を伸ばしていきました。情報処理学会全体の会員数が減っている中ではかなり健闘しており、現在も430名ほどの会員がいます。

DSM研究会の初代主査は石田晴久先生でしたが、1997年から1998年は林先生が主査をされました。その後は、電気通信大学の箱崎先生、大阪市立大学の松浦先生、九州大学の藤村先生に引き継がれました。

林先生が編集委員長を担当されました。これらのDSM特集号に論文が採択されて、学位を取得した、あるいは昇格したという人が何人もいます。林先生が編集委員長のときは、最も採択率が高いことがわかります(図2)。これは林先生が甘く審査をしていたわけではなく、DSM特集号に論文を出してくれと、林先生が優秀な論文を集めてきた結果です。

林先生は、DSM研究会発足前後の5年間で、実質的な代表者としてご尽力されました。その結果、システムの構築や運用管理での創意工夫を研究業績として認める礎を築いていただきました。さらに、情報系センター教員のキャリアパスを開拓して、いわゆる飼い殺しから脱却できました。それにより、今の私があります。センター教員の活躍できる場を創造していただいたことに心から感謝いたしますとともに、林英輔先生のご冥福を、心よりお祈り申し上げます。

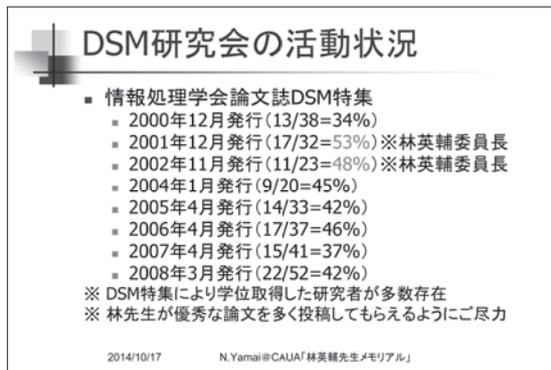


図3 情報処理学会論文誌 DSM 特集採択率

また、DSM研究会では情報処理学会論文誌において「DSM 特集号」を2000年に最初に発行し、その後、今に至るまで、毎年発行し続けています。特に、2001年と2002年は、

8 藤村直美：研究会千夜一夜「分散システム/インターネット運用技術研究会」、情報処理学会誌「情報処理」48巻11号、pp.1290-1291、2007年11月。